

## 曲直瀬道三の構想した脈学

神奈川 吉岡広記 2013/11/16 第21回日本鍼灸学会学術大会配付資料

### 月湖『全九集』と道三『全九集』における脈論の構成と相違一覧

【凡例】1. 表1は月湖『全九集』卷3の、表2は道三『全九集』卷1の、脈論の篇目ならびにその典拠と内容を示したものである。2. 両書の篇目に便宜的に番号を附した。3. 月湖『全九集』の構成は、道三のそれと異なり、脈略要之初・中・奥の大項目の中に各篇が納められ、かつ各項目の末にその簡単な説明が付されていることから、それらも明記した。4. 両書においていざれか一方にのみ見られる篇目は網掛にして区別した。5. 典拠が複数ある場合には、構成順に列記した。また内容には両書の相違や扱われている概念などを記した。6. 道三本については月湖本との篇目と内容の一致不一致を内容の次に示した。篇目の一一致した場合(類似しているものも含む)は便宜的に付した番号を記し、不一致の場合には何も記さなかった(網掛部分に相当)。また内容の一一致した場合は「○」、不一致の場合は「×」を、一致するも道三の按語が見られる場合は「●」を、その他の付加が見られる場合は「▲」を、節略の見られる場合は「▼」を記した。

表1. 月湖『全九集』卷3

篇目		典拠	内容
脈略要之初(初)	01:七表脈者是客邪來傷也	『潔古老人注王叔和脈訣』卷五・七表脈交変略例論・張元素注	張元素注に類文が見られるが、おそらく独自の論である。 七表脈が外因(客邪)を、八裏脈が内因を示す脈状と定義し、内外因を分けるという主張を行う。
	02:八裏脈者是內因自傷也	『卷六・八裏脈交變略例論・張元素注』	ただし、03にて引く四脈の論と矛盾する。
	03:九道脈陰陽各別而相交也	『卷七・論九道脈』 『脈訣理玄秘要・脈旨綱領』	九道脈のほかに、劉闌の論に基づき二十四脈の宗と見なされる四脈(浮沈遲數+有力無力)により風氣冷熱を診ることと、寸関尺三部(上中下焦)の診脈意義を述べる。ただし、04~06は寸口診を前提とした脈の主病のみを挙げている。
	04:七表歌	海藏(王好古) ?	『普濟方』卷三・論七表脈主治所引海藏に類文有り。七表脈の脈證(主病)。
	05:八裏歌	未詳	八裏脈の脈證(主病)。『王叔和脈訣』を節略か。
	06:九道歌	未詳	九道脈の脈證(主病)。『王叔和脈訣』を節略か。
	07:四時平脈	『素問』平人氣象論篇、玉機真藏論篇	四時の平脈を挙げる(「春微弦、夏微洪、秋微浮、冬微沈」。長夏は無い)。
	08:四時虛脈	『素問』六節藏象論篇	07を承け、四時各々における虚脈を挙げる(長夏を加える)。春に冬の脈を得る場合を虚とするもので、『素問』六節藏象論篇の「至而不至、此謂不及」を根拠とする。
	09:四時実脈	『素問』六節藏象論篇	07を承け、四時各々における実脈(太過の病)と虚脈(不及の病)を挙げる(cf.「春脈弦而實強」「春脈微虛而無弦状」)。『素問』玉機真藏論篇の四時における気(脈)の来去の盛不盛や脈状により定められた「太過」「不及」の論を、一義的に「其氣來實強、是謂太過」「其氣來虛微、是謂不及」とした『難經』十五難を根拠とする。
	10:又虛實之一通	『難經』十五難	07を承け、四時各々における実脈(太過の病)と虚脈(不及の病)を挙げる(cf.「春脈弦而實強」「春脈微虛而無弦状」)。『素問』玉機真藏論篇の四時における気(脈)の来去の盛不盛や脈状により定められた「太過」「不及」の論を、一義的に「其氣來實強、是謂太過」「其氣來虛微、是謂不及」とした『難經』十五難を根拠にする。
脈略要之中(中)	11:残賊之脈	『注解傷寒論』平脈法・成無己注	「問曰、脈有殘賊何謂也。師曰、脈弦緊浮滑沈濶、此六者名曰殘賊。能為諸脈作病也」の注。
	12:同等之脈	『傷寒論』弁脈法	「問曰、脈病欲知愈未愈者、何以別之。答曰、寸口關上尺中三處、大小浮沈遲數同等、雖有寒熱不解者、此脈陰陽為和平、雖劇當愈」を「寸関尺三部、大小浮沈遲數同等、雖有寒熱不解、為陰陽和等、雖劇必愈」として節略して引用する。
	13:反常之脈	『王叔和脈訣』形脈相反歌*	「健人脈病、病人脈健、長人脈短、短人脈長、瘦人脈肥、肥人脈瘦、小壯脈老、老人脈壯」。 *診暴病歌の後に置かれる篇で、もとは又歌に作るが、元・戴啓宗『脈訣刊誤』において形脈相反歌とされ、明・熊宗立『勿聴子俗解脈訣大全』では形證相反歌とされた。
	14:三部九候	未詳	「左寸浮候小腸、中胃氣、沈候心。…右尺浮候三焦、中胃氣、沈候胞絡」として、三部を寸関尺、九候を浮中沈と解し、さらに三部を左右に分け各部の蔵府配当を充て、六部の浮中沈の意義を示す。中は各部とも胃氣をうかがう。典拠は未詳であるが、『難經』十六難の呂広・丁徳用の注に拠ったと見られる。
	15:閑格之脈	『難經』三難	「自寸口溢上魚際、謂之外關內格脈。自尺中覆下尺尻、謂之内關外格脈」とし、改変して引用する。
	16:持脈輕重	『難經』五難	菽法による五藏の脈位と指の軽重を述べる。道三本では02定三部之位において、男女による左右の診脈の先後や寸関尺に指を当てる順序を論じた『察病指南』卷上・下指輕重法を引いており、両者の軽重についての認識が異なっている。
	17:男女	『黎居士簡易方論』卷一・弁男女形神育論?	道三本では『黎居士簡易方論』の「男子為陽、先生右腎則為命之門。女子為陰、先生左腎則為命之門」を引いていることから、「三部脈位、女亦同男、但腎命門異矣」はその意訳と見られる。
	18:主客伏匿	『難經』十九難?	同様に、「男脈寸口盛、女脈尺中盛、是其常也」は、『難經』十九難の意訳である。
	19:内外別	『察病指南』卷上・診病内外法	「脈浮大者、病在外。沈細者、病在内」。諸病源候論』卷十三・脚氣病諸候・脚氣緩弱候が初見か。
	20:縱横逆順之弁	『傷寒論』平脈法 『王叔和脈訣』診婦人有妊歌 『難經』五十難	『傷寒論』の縱横逆順の論を基づく『王叔和脈訣』の夫妻母子の縱横逆順に『傷寒論』と『難經』の經文をつなぎ合わせ、「夫乘妻曰縱、水行乘火之類也、賊邪。妻乘夫曰橫、火行乘水之類、微邪。子乘母曰逆、火行乘木之類也、實邪。母乘子曰順、木行乘火之類也、虛邪」とする。
脈略要之奥(奥)	21:陰陽二傷弁	『注解傷寒論』平脈法・成無己注	11残賊之脈の中の2条文「傷於陰則脈沈」「傷於陽則脈浮」を引く。
	22:陰陽二虛弁	『明医雜著』卷一・医論	第十四條目「陰虛發熱云々」に見られる脈状群を抜粋したもの。「脈數而無力、屬心腎。脈大而無力、為陽虛。脈數而無力、為陰虛。有力為實。無力為虛」の5条文。
	23:妊娠弁	『察病指南』卷下・弁胎脈	施発の注をも引用するが、経文の選択が見られる。
	24:小兒虎口弁	『察病指南』卷下・看小兒虎口訣	施発の注をも引用するが、経文のわざかな節略も見られる。『察病指南』に依拠しているため、虎口三関(気関、風関、命関)についての論は無い。
	25:原夢	『察病指南』卷下・原夢	『靈枢』淫邪發夢篇や『素問』脈要精微論篇に拠るもので、五藏ならびに上下、陰陽、飢飽、長短の虫の盛んな場合の夢を論ず。

表2. 道三『全九集』卷1 \*天文十三年(1544)、全七巻。道三39歳。脈論は卷1の冒頭に置かれる。

篇目		典拠	内容	月湖
01:診脈榮衛之分別	『靈枢』營衛生會篇、五十營篇	脈の和訓(チスヂ)にはじまり、『靈枢』に拗り脈の内外を流れる气血榮衛を述べ、最後に診候、すなわち「氣ノ往来、血ノ流通ノ太過不及、虛實遲速フトココミカガウ」べきことの重要性を説く。		
02:定三部之位	『難經』二難、一難 『察病指南』卷上・下指輕重法	『難經』二難に拗り寸関尺三部の分寸を示すが、寸尺の界としての「関」の長さを一寸とし、三部を二寸九分と規定した点に特徴がある。また、『察病指南』の「男先診左手、女先診右手」を踏襲するが、診脈の挙按については「令徹骨漸徐拳指」ではなく、寸口は「イカニモ指ヲカロク」、尺中は「指ヲオモクシテ」、関上は「カロクオモクナクヨキコロ」にて取れとし、異なる。		
03:七表論	『王叔和脈訣』論七表脈	脈状と脈證(寸関尺*)を論ず。月湖の提唱した内外因についての論は斥けられる。道三の内外因と四脈の重要性の理解が未だ不十分であったためか。	04 ×	
04:八裏論	『王叔和脈訣』論八裏脈	*ただし、脈状と脈證を記した主要部分と続く歌曰までの意訳にとどまるため、又歌曰とした歌訣は対象とせず、そのためすべてが寸関尺の脈證を示すわけではない。	05 ×	
05:九道論	『王叔和脈訣』論九道脈		06 ×	
06:七種之死脈	『察病指南』卷中・弁七表八裏九道七死脈	七死脈(彈石、解索、雀啄、屋漏、蝦游、魚翔、金沸)。		
07:四時之平脈	『素問』平人氣象論篇 玉機真藏論篇	道三は「四時ノ平脈ナリ。但、微ニシテ弦ナリト云フコトニハアラズ。イカニモウツクシクスゴシ、弦ノカタチノ有ルカト云意ナリ。洪浮沈モ皆コレニナラヘ」と按語にて解説を加える。	07 ●	
08:四時之虛脈	『素問』六節藏象論篇	道三は「タトヘバ早クノ時節ハイタリタレドモ当季ノ脈ハイタラズシテスギサリタル季ノ脈ヲアラワスナリ。是ヲバ当季ノ主スル藏と其ノ母ノ藏トヲカ子テヲキノフベシ」と按語にて解説を加える。	08 ●	
09:四時之實脈	『素問』六節藏象論篇	道三は「タトヘバ未ダ其ノ時節ハイタラゼドモ藏府実スル故ニハヤトリコシテ来季ノ脈ヲアラワス。是ヲ当季ノ旺スル藏ト其ノ子ノ藏トヲ兼テ瀉スベシ」と按語にて解説を加える。	09 ●	
10:又虛實之一通	『難經』十五難	月湖本の内容を参照のこと。	10 ○	
11:同等之脈	『傷寒論』弁脈法	月湖本の内容を参照のこと。	12 ○	
12:変常之脈	『王叔和脈訣』形脈相反歌	月湖本は「反常之脈」とする。内容は月湖本を参照のこと。	13 ○	
13:閑格之脈	『難經』三難	道三は「此レ閑格ハ陰陽偏勝ノ脈也、譬バ陰ノ太過シテ陽ノ不及ナル時ハ魚際ニ溢ルルナリ。陽ノ太過シテ陰ノ不及ナル時ハ尺外ニコボルルナリ。急疾大病ニ此ノ得タラバ必危シ」と按語にて解説を加える。	15 ●	
14:男女之異	『難經』十九難 『黎居士簡易方論』卷一・弁男女形神育論	「男ハ寅ニ生ジテ陽ナリ。陽ハ火ニノツツテ炎上ス。女ハ申ニ生ジテ陰ナリ。陰ハ水ニノツツテ下流ス。故にツ子ニサカンニシテ寸脈ヨワシ」と、月湖本で節略された『難經』十九難の男女と十二支の関係を引き、さらに水火陰陽の論を注釈的に加える。	17 ▲	
15:主客伏匿之弁	『難經』二十難?	「寸口ニ沈濶微短ノ陰脈アラレテ、十動二十動ノ間ニ、モシ浮洪ノ陽脈一動ニ動ナト交リ見ルハ客陰ノ邪太過ナル」などとして、脈動を交えて月湖本の説を分かれやすく訓釈している。さらに「右療治ニ專イル事也」として、「主伏」には「主氣ヲ補ナビ邪氣ヲ瀉スベシ」、『潛伏』には「客邪ヲ瀉シリゾケ、少氣ヲ補フベシ」と補瀉を論ず。それのみならず、客邪があるも「左右ノ三邪〔恐部〕之誤」に脈のうたない「双伏」と、「一手三部」にうたない「短伏」を新設する。なお、「陰中伏陽」については触れず、「寸口ニノミ見レテ一向ニ見レザル」場合を「元氣絶」とし、その逆を「元氣タダンク有ル」とも述べていることから、「主伏」は「陽中伏陰」のみと考え、かつ上実下虚(陰虛邪実)を予後不良と見ていることがわかる。ただし、諸書に未見の論である。	18 ●	
16:病ノ内外ノ異	『察病指南』卷上・診病内外法	道三按語に「カクノゴトク陰陽ニテ内外ヲワキマヘ、其上ニテ遲數ヲ分別シテ寒熱ノ病トハサダメベシ」と有り、意図的か無理解か不明であるが、03で排除した四脈を少なからず意識していたことを示している。	19 ●	
17:懷妊ノ脈例	『察病指南』卷下・弁胎脈	月湖本の末に置かれる出生を示す文を削除する。	23 ▼	
18:新産脈ノ吉凶	『脈訣刊誤』卷下・新產生死歌	ただ訓読するのではなく、例えば「來侵若得沈、重小者吉。…沈細附骨不絶生」とあるところを「沈重ナルモヨシ、沈細ニシテホ子ニツクハ吉ナリ」として意訳する。		
19:小兒虎口ノ弁	『察病指南』卷下・看小兒虎口訣	施発の注の後に、「風關ニ見ルハ治シ易シ、気關ニイタルハ病カシ、命關ニイタレバ療治シガタシ、ヲオクハ死スルナリ」として虎口三関(『水鏡訣』(佚書)『薛氏医案』本『錢氏小兒葉證直訣』癲癇證治の附虎口三關脈症図、『保嬰金鏡錄』脈法などに引かれる)についての論を加える。	24 ▲	
20:原夢	『察病指南』卷下・原夢	道三は「タトヘバ」として飢飽に関する論を末に置き、「是ソノ證拠也」と締めくくる。	25 ●	

**両書の構成の相違:**月湖は、①初学者の基本を述べた脈略要の初、②脈診に熟達した者が学ぶべき事柄を挙げた中、③脈診の奥儀の3段階に分けており、道三は序列こそ踏襲するが内容のレベル分けは排除している。また篇目は、月湖本は25篇、道三本は20篇と、5篇の差があるが、単に道三本での減少を示すものではない。篇目から16篇が一致し、月湖本のみのものは9篇、道三本は4篇と出入がある。一致する16篇の中で内容の全く異なるものが3篇、そのまま踏襲したのは3篇のみであった。その余は7篇に道三の按語が附され、2篇に按語以外の付加もある。節略が見られるのは1篇のみであった。

**両者の意図の相違:**道三は冒頭の2篇に月湖本には無かった脈診の前提、意義、重要性ならびに診脈部位(寸関尺)と挙按の問題を配置することで、より基本的な構成に作りかえていると見ることができる。統<sub>月1~3</sub>03~05(以下、道三本を<sub>月</sub>月湖本と略す)では月湖の最大の主張である<sub>月</sub>01~03)を斥け、『王叔和脈訣』に沿った内容へと書き換え、『察病指南』をもとに06七死脈を

加える点からも、より標準的な脈書の体裁に直していると言えよう。また、『傷寒論』に由来する<sub>月</sub>11~12~20~21は、脈書では取り上げることの少ない内容であり、道三は<sub>月</sub>12を除いて削除している。これもまた月湖の見識が色濃く反映されている点であろう。道三によって削られた9篇を、底流にある概念の側面から眺めると、次のことを推定できる。五行に関わる14(蔵府)・16(五藏)・20(五行相剋)、陰陽虚実に関わる01~02~03~21~22は道三にとっては不要の論であった。五行でも四時に関すること、それも太過不及といふ概念の関わるもの、陰陽でも寸尺などにより上下内外の太過不及や順逆といふ、内外因や蔵府陰陽などよりも、より狭い概念で理解できるものを好んで選択しているように見える。<sub>月</sub>11については詳らかではないが、部位の規定もなく、脈状のみで、理解が曖昧になるのを嫌ったのかもしれない。以上より、月湖は諸書の内容を咀嚼して内外因、陰陽虚実、蔵府など幅広く扱おうとしたのに対し、道三はオーソドックスな脈書に戻すとともに、寸尺を中心とした陰陽的な概念で捉えられる上下内外の範囲で論を進めようとしたように見える。